

私が生まれた次の年、昭和21年からは生徒の数は増えに増えていた。生存競争も激しくなってきた。後に、あの学園紛争を起す団塊の世代である。あれは大

娛樂もなかった。あるとすれば近所のラジオから流れる流行歌であった。物心ついた頃に聴いたのが「長崎の鐘」であった。あの日から流行歌とは思えない歌詞の「長崎の鐘」は耳にこび

# 身近だと気づかぬ

り付いている。この年の5月1日に「長崎の鐘」の著者永井隆博士は、長崎大学付属病院で死去している。

佐世保港に着く「戻り船」は復員兵や帰国者であふれていた。その子どもたちが団塊の世代となるのである。昭和26年、私が物心ついた頃、星鹿にはなんの

川森一さんも「やられました」と素直に言っていた。長崎市の演劇人も「このテーマには気がきませんでした」とうなるよう

平成20(2008)年、舞台劇「長崎の鐘」を書き、新宿の紀伊國屋ホールで上演をした。「県北のあなたがなぜ「長崎の鐘」を書いたのか」とよく尋ね

寺院と教会の見える風景や王直の六角井戸がある。伊万里には秘釜の里、大川内山の異郷の風景がある。しかし、ついでがあればわが星鹿半島城山に登っていたきたい。晴れた日には志

岐対馬の遠くに永遠が見える風景がある。耳を澄ませば法螺貝や合戦の音がする。すぐそこには青島がある。手を振れば青島の人々が応えてくれるのではない

かという風景である。少年時代、磯遊びが好きだった。青島や津崎の灯台の下の岩だらけの海岸で、潜ってはさざえを採り、魚を突いた。魚は熱帯魚のように鮮やかな色をしていた。海のはるか彼方には外国航路の白い巨船がもくもくと黒煙を吹いていた。(松浦市出身)



おかべ けんじ 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。